

尾張の拠点城館遺跡出土の 瀬戸美濃窯産陶器

時期別組成の分析を中心に

● 鈴木正貴

清洲城下町遺跡、岩倉城遺跡、小牧山城関連遺跡群の各遺跡から出土した遺物組成の再検討を行った。特にここでは、各遺跡から出土した瀬戸美濃窯産陶器に着目し、藤澤良祐氏の編年観で同定作業を行い、主要遺構の時期別組成などを算出した。この結果、遺跡や遺構に固有に確認される年代よりも前段階の遺物の出土量が多いことが明らかとなった。そして出土量の多い遺物で各遺跡の変遷を改めて検討すると、明瞭な形で1前期清須と岩倉の段階、2小牧の段階、3後期清須の段階（天正地震前）、4後期清須の段階（天正地震後）と分けることができると推論した。尾張における拠点的な城館遺跡の移動状況を考古学的に把握することができたと同時に、大窯編年から遺跡や遺構の年代を解釈する際には様々な問題点を孕んでいることが予見された。

私達は、発掘調査で確認された遺構や遺跡の年代について様々な要素を検討しながら推察している。だが、実際には年代の手がかりとなる事柄は少なく、いきおいそこから出土した遺物の所属年代を大いに参考にして時期を考えることが多いだろう。もちろん、その遺物が遺構や遺跡に埋まるまでの間に経た様々な遍歴などに思いを寄せながら、であるが。しかしながら、その中にはさまざまな問題が潜んでいる。

1 本稿の目的と研究史

本稿では、本センターが発掘調査を行った清洲城下町遺跡と岩倉城遺跡および小牧市教育委員会が発掘調査を行った小牧山城関連遺跡群から出土した瀬戸美濃窯産陶器の遺物組成を算定し、そこに見られる諸問題を検討する。

(1) 清洲城下町の遺物様相についての研究の流れ

ここでは、消費地遺跡での遺物様相を考察することが目的であるため、最初に筆者がこれまで調査に関わってきた清洲城下町遺跡の遺物様相についての研究の流れをみる。

まず、清洲城下町期の考古学的研究は遺構を大きく前期と後期に分けて考えることから始まった(梅本1986)。この2期区分をさらに細分する必要性を感じた筆者は、県道新川清洲線関連調査の報告書の中で5期に分け(鈴木編1990)、さらに尾張の拠点的な城館遺跡の事例を

用いて瀬戸美濃窯産陶器の諸問題などを取り扱った(鈴木1990)。ここでは不十分ながら遺物の時期別や器種別組成を求め、使用形態や大窯編年の問題などを考えた。次に、筆者は五条川河川改修関連調査の報告で時期を3期6小期に区分し、出土遺物組成データを可能な限り提示した(鈴木編1994)。そして清洲城下町の遺物様相の変遷を検討し、天正地震以前に後期的な遺構配置や遺物様相を持つことなどを確認した(鈴木1995a)。これを受けて遺物組成について詳しく論じた際には、地区における遺物組成の差は土師器皿に顕著に認められる一方、陶磁器類でも平均化すると一定の傾向が存在することを明らかにした(鈴木1995b)。さらに、土師器皿の出土割合について時期ごとに分析した結果、前期と後期では地区別の土師器皿組成の様相が異なることが確認され、その意義について大胆な仮説を提示した(鈴木2000)。

このように、地区別の遺物組成に関してはそれなりに分析が進み一定の成果を得るに至っている。しかし、遺物の編年や使用形態に関わる問題については、未だ十分に検討されているとは言えない状態である。

(2) 瀬戸美濃窯産陶器の編年

そこで、今回は瀬戸美濃窯産陶器を中心に検討する。ここで取り扱う瀬戸美濃窯産陶器は古瀬戸(窖窯)末期から大窯を経て連房式登窯初期までの製品を含んでいる。この中で特に問題と

なる瀬戸美濃窯産陶器の大窯編年について研究史を整理しておく。

瀬戸美濃窯産陶器の大窯の本格的な研究は赤塚幹也に始まり、榎崎彰一が提示した5期区分により一定の方向性が与えられた(榎崎1977など)。5期区分は特定の器種や釉薬の出現と匣鉢詰め方法を重視した編年案であり、井上喜久男の編年に受け継がれている(井上1985など)。また、伊藤嘉章は匣鉢詰め方法、器形の組み合わせ、施釉方法の変遷を一体的に考え4段階に区分した(伊藤1988)。これに対して、藤澤良祐は各器形の型式学的研究を行いその変化をもとに5段階区分の編年案を提示した(藤澤1993など)。特定器種や新技術の登場を基準に組まれた5期区分編年は、消費地遺跡での時期区分に際しては有効に機能しない場合がある(鈴木1989、鈴木1990)ことなどから、今回ここでは藤澤良祐の5段階区分の編年を使用する。

2 今回用いる分析の方法

本来であれば、各遺跡から出土した遺物全体を分析の対象とすべきであるが、清洲城下町遺跡と岩倉城遺跡では出土遺物の量が膨大であり、現実問題として資料整理ができない状態である。ここでは、この2つの遺跡については、報告書に掲載された遺構一括出土資料のみを取り上げる。

清洲城下町遺跡については、筆者が藤澤分類を参考にして作成したカウント用分類によるデータが蓄積されている(鈴木編1994、鈴木・小嶋編1994、蟹江編1996、鈴木編1997)。この分類は藤澤5段階区分編年の型式分類とおおよそ合致すると思われるが、決して同一ではなく、計測に際して誤謬も多く含まれていることが予想される。従って、このデータはおおよその傾向を示しているものの、時期別組成などを厳密に分析しようとする多くの問題点が存在し、議論の進展も望めない。

このような事情から、今回行なった分析方法は、5段階区分編年を作成した藤澤良祐氏に取り上げる瀬戸美濃窯産陶器の全資料の分類を依頼し、この結果を筆者が集計し分析した。数量化の方法は、藤澤良祐氏がこの他の遺跡で行った事例と比較検討が行いやすいように、接合後の

破片数を求めた。なお、遺物全体の組成の数値は、筆者等が報告書に掲載した接合前破片数のデータを使用している。今回の数値と報告書の数値が異なる部分があるのは、小破片の処理方法の違い、接合作業の前後の相違、分類基準の違い、報告書データの誤謬などの理由が考えられる。この点はあえて確認作業や訂正などを行わなかった。

岩倉城遺跡については公開されたデータが存在しないため、今回初めて出土量を計測した。清洲城下町遺跡と同様に、全体の遺物様相については筆者の分析方法(接合前破片数)で、瀬戸美濃窯産陶器の詳細については接合後破片数で求めた。また、小牧山城関連遺跡群の資料については、藤澤良祐氏が調査した詳細なデータが存在しており、今回はこれを提供いただき、小牧市教育委員会の了解を得てそのまま借用している。

3 各遺跡の概要と事例の紹介

(1) 清洲城下町遺跡

清洲城下町遺跡は尾張平野を南流する五条川中流域に所在する。尾張守護所が文明8(1476)年に清須に移転して以来、尾張の中心地として繁栄した。織田信長は弘治元(1555)年に入城し、永禄6(1563)年には小牧へ居城を移したが、その直後の清須の様子は詳らかではない。清須会議後に織田信雄が尾張など数国を領有し、天正13年11月(1586年1月)発生为天正地震を契機として、天正14(1586)年に清須に入城し大改修を行ったとされる。信雄以降は豊臣秀次、福島正則、松平忠吉、徳川義直が次々と居城とした。徳川義直は慶長15(1610)年に居城を名古屋城に移し、城下町全体を移転する清須越しは慶長18(1613)年にはほぼ完了したといわれる。

発掘調査は様々な事業に伴う事前調査として行われ、現在清須城下町に関わる調査の総面積は約9haに及ぶ。今回取り上げる遺構は次の6つである(遺構の表記は鈴木1995aの方式に拠る)。

S K 250は県道新川清洲線関連の発掘調査で確認された土坑である(鈴木・小嶋編1994)。五条川河原付近に所在し、鈴木清須編年では期(鈴木1995a:以下同様)に属する遺構である。瀬戸美濃窯産陶器の接合後破片数は97点であ

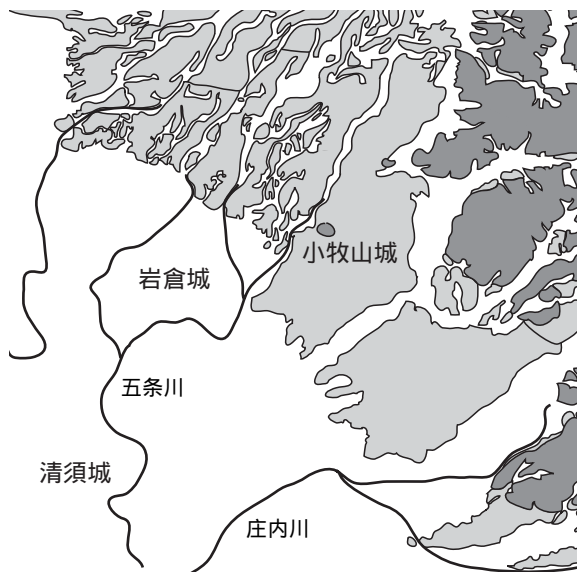


図1 各城館の位置図

る。大窯第2段階のものが1点含まれる他は全て、古瀬戸後 期新段階から大窯第1段階に属する製品ばかりである。

S K 4501は五条川河川改修関連の発掘調査で確認された遺構である(鈴木編1994)。旧五条川N R 4001がある程度埋積した後には作られた溝状の土坑で、報告書では 期の遺構と報告されている。報告書では遺物の報告がされていない資料であるが、 期の資料として取り上げた。瀬戸美濃窯産陶器の接合後破片数は154点である。大窯第2段階の製品が18点存在するが、古瀬戸後 期新段階から大窯第1段階に属するものが半数以上を占める。

S D 01は県道新川清洲線関連の発掘調査で確認された大溝で(蟹江編1996)。清須城居館の外堀に推定されている。上層から 期以降の遺物が出土するが、遺構の主体は 期に属すると思われる。今回の再調査に際して播鉢の資料が一部欠けている可能性があるが、今回調査した瀬戸美濃窯産陶器の接合後破片数は4105点である。大窯第4段階後半の製品が5点存在するが、大半は古瀬戸後 期から大窯第1段階に属するものである。

S K 6570は五条川河川改修関連の発掘調査で確認された廃棄土坑である(鈴木編1994)。本町地区の町屋推定地に所在する遺構で、天正地震による噴砂に覆われており、 2期に属す

る。瀬戸美濃窯産陶器の接合後破片数は301点である。このうち大窯第4段階後半の製品が2点あるものの、大窯第3段階に属するものが133点存在している。

S K 6151は五条川河川改修関連の発掘調査で確認された廃棄土坑で(鈴木編1994)。S K 6570と同様に本町地区の町屋推定地に所在する。天正地震後に造成された整地層上面から掘り込まれており、 期に属する資料と考えられる。瀬戸美濃窯産陶器の接合後破片数は610点である。大窯第4段階の製品が136点存在するが、連房式登窯に属するものは全く認められない。

S K 7029は五条川河川改修関連の発掘調査で確認された遺構である(鈴木編1994)。南部地区の久証寺裏に所在する大形の長方形土坑であり、清須城最末期に位置付けられるものである。瀬戸美濃窯産陶器の接合後破片数は1791点である。最新資料は連房式登窯第5小期に属するものの7点であるが、最も多いものは大窯第4段階と連房式登窯第1小期に属する製品である。

(2) 岩倉城遺跡

岩倉城遺跡は愛知県岩倉市に所在し、五条川の中流域で標高8~10mの自然堤防上に立地する。岩倉城の築城年代は記録に残っていないが、文明11(1479)年に斯波氏と織田氏両家の内紛の和議が成立し、織田敏広が葉栗・丹羽・中島・春日井の尾張上四郡を治め岩倉を本拠地にしたのが始まりと推定される。織田敏広の後には、織田寛広、敏信、信安、信賢と城主を替え、永禄2(1559)年に織田信長に攻め滅ぼされ廃城となった。清須城は南南西約7kmに位置する。

発掘調査は県道萩原多気線建設に伴う事前調査として行われた。調査区は五条川両岸にわたり、特に右岸では岩倉城本丸跡を横断する形で設定された。調査の結果、五条川両岸で戦国時代の遺構群が確認され、本丸を囲む内堀や外堀の他に本丸内を区画する溝も数本検出された(松原編1992)。

今回は岩倉城本丸を囲む堀と本丸内の区画溝の5つの遺構を取り上げる。S D 01は本丸西側の外堀、S D 02は本丸西側の内堀、S D 08は本丸東側の外堀である。これらの堀は現在も地形として読み取れる状態で残存していて、上層では廃城以降の新しい遺物が多量に混在していた。

取り上げる資料は戦国時代に位置付けられるものに限定した。また、S D 03とS D 06は本丸内を区画する南北溝で、幅は3～5m、深さは1.7～2mを測る。特にS D 06から出土した天目茶碗が大窯第3段階の初現年代を決定する一つの資料となっている(檜崎1990)。

出土遺物の分析の結果、まずS D 03とS D 06では土師器皿が9割以上の割合で出土しており、本丸部分での遺物様相の特色が認められる。瀬戸美濃窯産陶器の器種組成では、S D 03とS D 06の天目茶碗の占める割合が各々32.1%(102点)、21.5%(31点)と非常に高いのが注目される。瀬戸美濃窯産陶器の時期別組成では、各器種ともに、古瀬戸後期新段階から大窯第1段階までの遺物が多く、大窯第2・3段階の遺物も少量含まれる。特に播鉢は比較的新しい段階の遺物が多く認められるが、それでも大窯第2・3段階の播鉢は合計で21.4%強にしか過ぎない。

(3) 小牧山城関連資料

小牧山城は永禄6(1563)年に織田信長によって独立丘陵上に作られた城郭である。美濃攻略の拠点として築城され、尾張の新たな政治的経済的中心地にするため、小牧山南に広がる洪積台地上に城下町が建設された。しかし、織田信長が永禄10(1567)年に美濃国稲葉山城を落とし岐阜城と改め居城を移した段階で小牧城下町の役割は終わったようである。一方で城下町は規模を縮小しつつも存続したとも想定され、天正12(1584)年の小牧・長久手の合戦時に小牧山城が徳川家康・織田信雄連合軍の陣城として利用され総構えの改修が行われたとされる。

発掘調査は、小牧山麓部分の武家屋敷推定地と城下町部分(新町遺跡)で行われている。小牧山麓の武家屋敷推定地では小牧山城跡として小牧市教育委員会により発掘調査が行われ、屋敷を区画する溝などが確認されている。今回取り上げる資料は平成10年度調査分の資料である(小牧市教育委員会1998)。城下町部分については新町遺跡の発掘調査成果がある。小牧市堀の内4丁目の洪積台地上に立地する新町遺跡では、3次にわたる発掘調査が行われ、第2次調査では武家屋敷、第1次と第3次調査では町屋と考えられる遺構群が確認された。報告書では城下町期の遺構は全て信長が在城した時期(永禄6

(1563)～永禄10(1567)年)に限定されるという(中嶋他1998)。

新町遺跡では瀬戸美濃窯産陶器は全部で接合後破片数で498点存在し、大窯第3段階前半が最新資料となっている。小牧山麓武家屋敷推定地では瀬戸美濃窯産陶器は接合後破片数で69点存在し、1点の大窯第4段階後半の資料を除くと大窯第3段階後半が最新資料となっている。両者とも大窯第2段階の資料を多く含み、1563～1567年に限定できるという新町遺跡では大窯第2段階の資料が非常に多い。

4 分析の結果

(1) 時期別組成の整理

それぞれの遺跡に与えられた固有の年代観と瀬戸美濃窯産陶器の時期別組成を比較し、そこから読み取れる現象を整理する(表1～9)。

まず、便宜上各遺跡の資料を大きく時期ごとに整理する。はじめに清洲城下町遺跡の6遺構を大きく3群にまとめる。S K 250、S K 4501、及びS D 01出土資料を清須A群とする。これらは鈴木清須編年では～期に属する資料で、従来の清須前期に位置付けられる。S K 6570を清須B群とする。これは鈴木清須編年では2期に属する。清須の後期的な遺構配置の中で構築された土坑の一括出土資料であり、かつ天正13(1586)年発生の天正地震以前と年代を特定できる資料である。S K 6151とS K 7029を清須C群として取り扱う。これらは鈴木清須編年では～期に属する資料で、従来の清須後期に位置付けられる。岩倉城遺跡の各遺構出土資料は、詳細に見れば時期区分が可能であろうが、ここでは築城から廃城までの期間の遺物様相と理解し一括して取り扱う。小牧山城関連の各遺跡出土資料についても同様に一括して取り扱う。

次に、論点を絞るため、瀬戸美濃窯産陶器の時期別組成も大きく整理する。まず、各段階の前後段階などの細かい区分を一括し、各々古瀬戸段階確定、大窯第1段階確定、大窯第2段階確定、大窯第3段階確定、大窯第4段階確定、登窯段階確定と整理する。次に、大窯第1段階か第2段階か分からないといった資料や大窯であるが時期

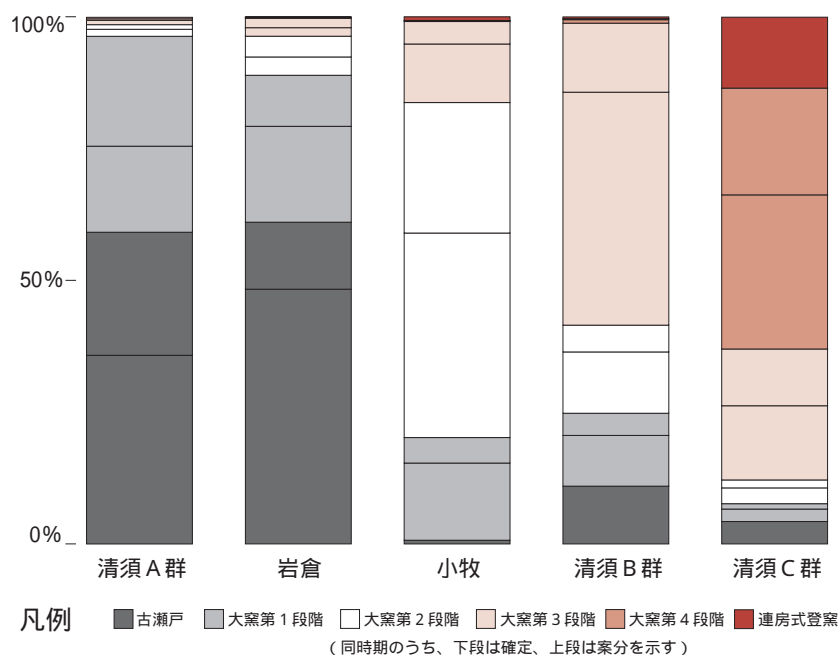


図2 瀬戸美濃窯産陶器全体の時期別組成図

を特定し得ない資料の点数を、各確定数値でそれぞれ案分して、古瀬戸段階案分、大窯第1段階案分、大窯第2段階案分、大窯第3段階案分、大窯第4段階案分として計算する。最後に各段階の確定と案分を合計して求めたグラフが図2・3である。

この結果、各資料群は全体でみると次のように整理された(図2)。

清須A群は、古瀬戸後期が確定と案分を合わせて約59%、大窯第1段階が約37%であり、大窯第2段階以降は全部合わせても4%以下である。最新資料は大窯第4段階のものが約0.4%含まれている。

岩倉は、古瀬戸後期が約61%、大窯第1段階が約28%であり、大窯第2段階以降は全部合わせても約10%である。最新資料は大窯第4段階のものが約0.3%含まれている。

小牧は、古瀬戸と大窯第4段階以降はほとんどなく、大窯第1段階が約19%、大窯第2段階は約63%、大窯第3段階は約15%である。最新資料は登窯第1小期のものが約0.7%含まれている。

清須B群は、古瀬戸後期が約11%、大窯第1段階が約14%、大窯第2段階は約17%、大窯第3段階は約57%であり、大窯第4段階以降は

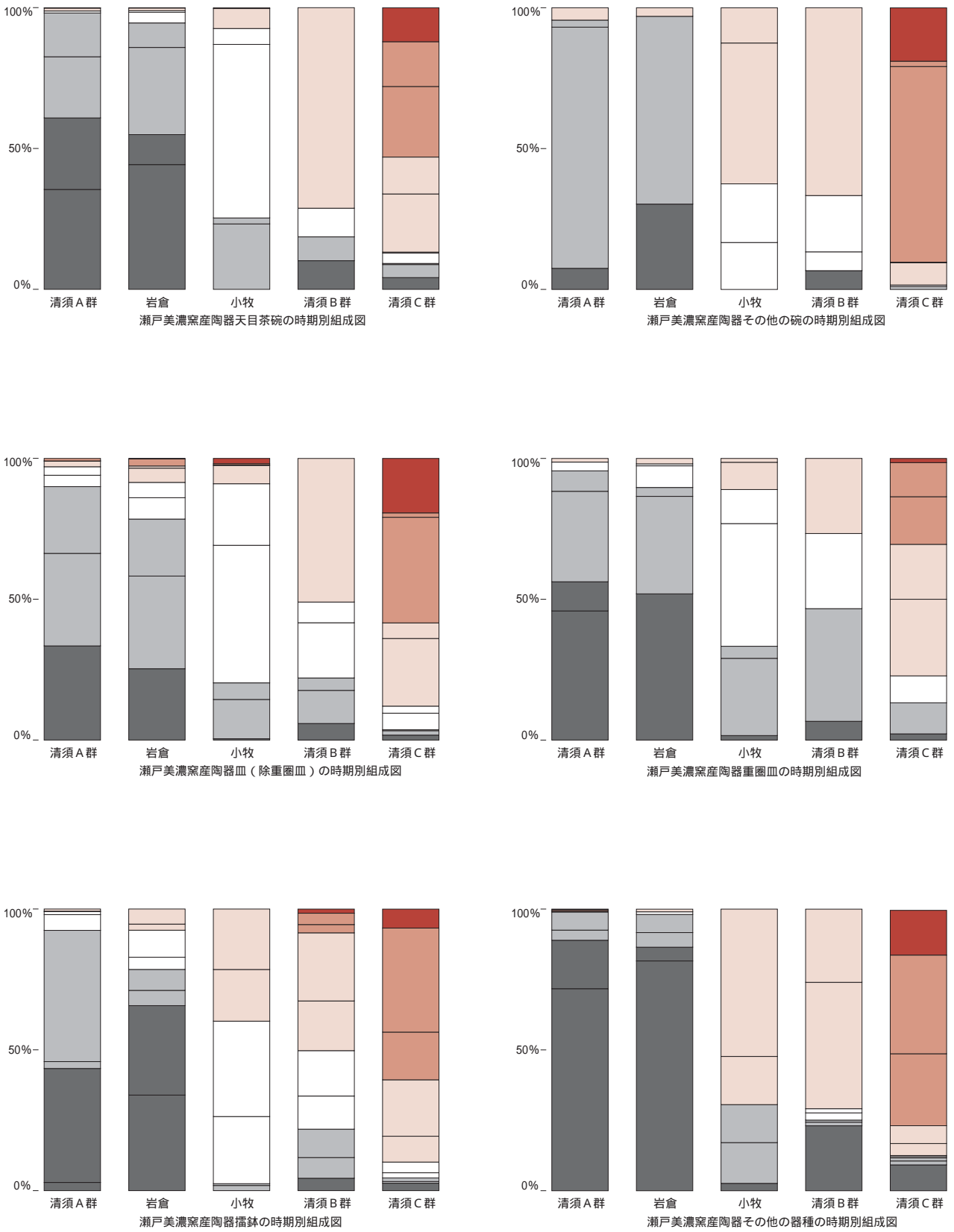
全部合わせても1%程度である。最新資料は登窯第1小期のものが約0.3%含まれている。

清須C群は、大窯第2段階以前は合わせても約12%前後に過ぎないが、大窯第3段階は約25%、大窯第4段階は約49%、連房式登窯期でも約13%の資料が存在する。最新資料は登窯第5小期のものが約0.7%含まれている。

(2) 時期別組成から読み取れる問題点

1%未満の時期の資料は後世の混入と考える(1%には特に根拠はないが)と、各群の最新資料は清須A・B群と岩倉と小牧は大窯第3段階、清須C群が登窯第1小期と評価される。この状態では清須前期と岩倉城と小牧城の時期(ここでは廃絶時期)はあまり変わらないこととなる。しかし、これを瀬戸美濃窯産陶器全体の様相として着目すると大きく遺物様相が各大窯編年と対応して変化していることを読み取ることができる。

すなわち、清須A群と岩倉は古瀬戸後期新段階と大窯第1段階が主体となる時期別組成に、小牧は大窯第2段階が主体となる時期別組成に、清須B群は大窯第3段階が主体となる時期別組成に、清須C群は大窯第4段階が主体となる時期別組成に各々なっていることが分かる。歴史的事実としての清須・岩倉から小牧へという変



凡例

■ 古瀬戸 ■ 大窯第 1 段階 □ 大窯第 2 段階 ■ 大窯第 3 段階 ■ 大窯第 4 段階 ■ 連房式登窯
 (同時期のうち、下段は確定、上段は案分を示す)

図 3 器種による時期別組成図

化は最新資料のみを取り扱ってはいよく分からないが、総体としてみると明瞭にこの変遷を辿ることができるといえよう。

上記のような現象は瀬戸美濃窯産陶器全体ばかりではなく、各器種ごとに整理しても窺うことができる(図3)。特に天目茶碗については、最新資料が非常に少なく主体となる時期の遺物の比重が増す傾向を読み取ることができる。一方、播鉢については逆に最新資料の比重が重くなる傾向がある。これは播鉢の使用頻度が高いために最新資料を含みやすいとした考察(藤澤1991、鈴木1990など)と合致する現象といえよう。

天目茶碗を除く碗類やその他の器種としたものについては、変則的な時期別組成となっているが、生産量の増減や編年上の問題などが関連した結果であると思われる。

5 考察

(1) 廃絶の前段階の製品が多い原因

上記のように、遺物の最新資料で遺構や遺跡の年代を決める手法と、出土量が主体となる遺物の時期で年代を決める手法では、その結果が明らかに異なっている。藤澤良祐も「廃絶時の大窯製品は少なく、その成立直前の時期の大窯製品が最も多いということが明らかである」と指摘している(藤澤2000)。

廃絶時の製品が少なく、前段階の製品が多いという現象はなぜ起きるのであろうか。このことについて藤澤は「遺跡の廃絶は出土する遺物の最も新しい型式で決定するという原則に立てば、編年観自体にも問題はなく、おそらく城下町形成にあたって、大窯製品が前の居住域から大量に持ち込まれたものと推察される」とした(藤澤2000)。この見解自体には矛盾はなく優れた仮説といえるが、果たして本当にそれだけが理由なのだろうか。筆者はいくつかの仮説を立ててみた(藤澤氏が作成した大窯編年の型式区分とその序列などについては、現在のところ筆者も正しいとみており、この点は今回は疑わないで記述する)。

仮説1 藤澤説。遺跡の成立に際し大窯製品が前の居住域から大量に持ち込まれたとする仮説。藤澤編年上で清須A群と岩倉にもともと多

量に存在したと考えられる大窯第2段階のものが小牧山城築城とともに運ばれ、これらの多くは小牧にて廃棄されたと考える説である。いわば、使用から廃棄までにおけるタイムラグが時期差を生む理由であると説明するものである。

仮説2 大窯最新段階の製品が生産され始めてから、その製品が一般的に流通するまでに時間差があるとする仮説。藤澤編年上で清須A群と岩倉の時期に生産が開始された大窯第2・3段階の製品が、消費地の末端まで大量に行き渡るように大窯製品が流通機構に乗るのは、小牧山城築城の時点まで待たなければならないと考える説である。いわば、生産から使用までにおけるタイムラグが時期差を生む理由であると説明するものである。

仮説3 最新段階の製品が生産され始めてもなお、前段階の型式の製品が(おそらく最新段階の製品を焼いた窯とは異なる別窯にて)生産され続けてきたとする仮説。藤澤編年上で小牧の時期に生産の盛期を迎えたと推測される大窯第3段階においても、なお大窯第2段階の製品が生産され続けていたと考える説である。いわば、生産のあり方によって時期差が生じると説明するものである。

この他に廃棄する際に、古い製品を選択して廃棄する状況なども考えられるが、これは仮説1に含めて考えることができよう。

今、この3つの仮説のうちどれが正しいか判断する手がかりを筆者は持っていない。むしろ筆者は、これら3つの仮説が複合的に関連して時期差を生んでいるように、現在は考えている。

(2) 遺物から遺跡や遺構の時期を考える時の問題点

重要な点は、こうした現象が消費地遺跡では普遍的に起こりうる現象であるということである。今回分析した清須・岩倉から小牧そして岐阜・清須へという事例ばかりではなく、藤澤が指摘したように、安土城、大坂城豊臣前期、名護屋城、一乗谷朝倉氏遺跡などでも例外なくこの現象は起っているのである(藤澤2000)。従って、消費地遺跡で瀬戸美濃窯産陶器の様相や年代を論ずる際には、この普遍的に起る現象を踏まえた上で行う必要がある。

確かに、遺跡の廃絶年代は出土する遺物の最

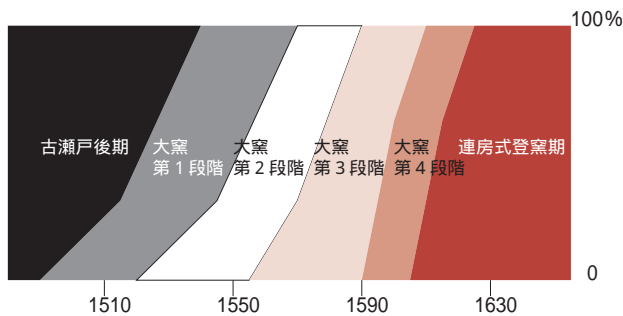


図4 瀬戸美濃窯産陶器の時期別組成変遷の概念図

も新しい型式で決定するという原則が有効であることに変わりはない。特に生産の開始年代などを考える上でこの厳密性は必要であろう。しかし、消費地遺跡で、この原則を適用して遺跡や遺構の年代を決定すると、極端に言えば1割以下の最新型式の遺物で年代を決めてしまうことになり、ここに割り切れないものが残る。現実の発掘調査の現状を考えると、少量の最新型式資料と少量の混入遺物をどう区別し判断すればよいのかという問題がある。また、瀬戸美濃窯産陶器の出土量が十分に多くない遺跡や遺構においては、少量の最新型式資料が欠落し誤った年代を導き出す危険性が高いといえる。仮に、十分な量の資料を得て分析しても、最新型式の資料で検討すると、清須A・B群と岩倉と小牧は大窯第3段階、清須C群が登窯第1小期という形で評価されてしまうのである。

筆者は、消費地遺跡で年代を考える際には、最新型式の遺物で決定するという原則を踏まえた上で、遺物全体の様相を検討することがより一層実態の解明に近付くのではないかと考える。

具体的に検討しよう。清須A群と岩倉は古瀬戸後期新段階と大窯第1段階を主体とする時期構成である。清須A群は清須前期に属すると考えられ、1476年以降おそらく小牧山築城までの様相を表したものである。また、岩倉は1479年以降廃城の1559年までの様相を示すものと理解できる。両者とも1470年代後半から1560年頃まで機能していた遺物群として捉えられる。小牧は大窯第2段階を主体とする時期構成で、1563年から1567年あるいは1580年代までの様相を示しているといえる。清須B群は大窯第3段階を主体とする時期構成で、その開始年代を特定し得ないが最終は1586年までに限定できる資

料である。清須C群は大窯第4段階を主体とする時期構成で、1586年から1613年までに限定できる資料である。これらをセリエーションのような手法を用いて模式図に示すと図4のようになる。

(3) この他の16世紀前半の調査事例

ここで、大窯第2段階を巡る時期についても少し近隣の他遺跡の事例を見てみよう。

天文8(1539)年銘卒塔婆が出土した一宮市大毛池田遺跡94Ab区SX01(武部編1997)では、当初は古瀬戸後期末の資料として紹介されてきたが、藤澤氏が実見した結果、接合後破片数で42点の瀬戸美濃窯産陶器のうち古瀬戸が37点で最新型式の大窯第2段階の資料は3点しか存在しないことが明らかとなった。

岐阜市城之内遺跡では天文4(1535)年に発生した洪水によって廃絶した枝広館の遺構群が確認されているが、ここでも大窯第2段階の資料までが出土している(内堀1993、内堀編1998など)。しかし大半の資料は古瀬戸後期新段階から大窯第1段階のものである。

天文15(1546)年銘硯が出土した東海市知多弥勒寺遺跡では、報告書掲載遺物に限ってであるが、多くの大窯第1段階の資料に少量の大窯第2段階に属すると思われる資料が認められる(立松編1998)。特に天目茶碗は大窯第1段階に属するものばかりのようである。

このように大窯第2段階が開始されると推定された1520年以降の年代が推測される資料群でも、実際には大窯第1段階(あるいはそれ以前)のものが多く傾向がある。もちろん、これらの遺跡の多くは大窯第1段階以前から遺跡として繁栄しており、廃絶の年代が新しくても大窯第1段階以前の製品が多く含まれることは当然である。しかし、仮に少量の大窯第2段階の資料が欠けていても大窯第1段階が主体を占める遺物群の廃絶時期は可能性として1550年くらいまで下ることもあり得る、という思いを巡らす必要があるのではないだろうか。

(4) 清須・岩倉から小牧、そして清須へ

従来、清洲城下町遺跡では大窯第2段階の遺物はそれなりに数量は出土していた。しかし、多くの場合、古瀬戸や大窯第1段階の資料群に少量の大窯第2段階の遺物が含まれるケースと、

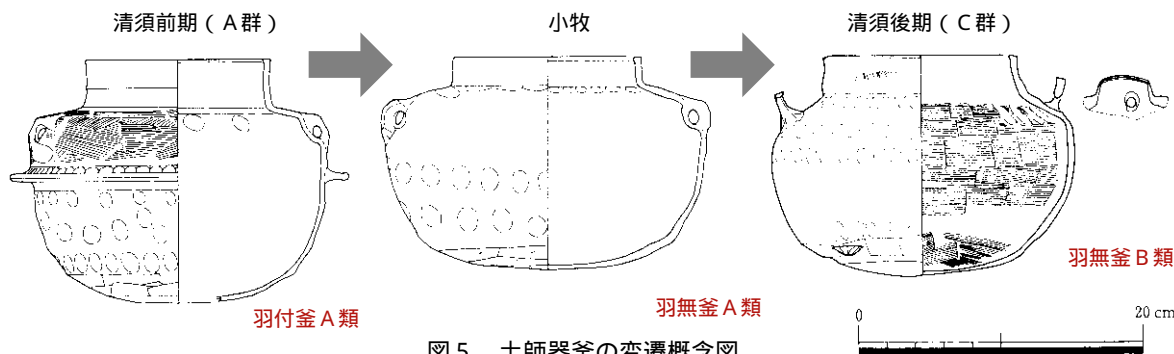


図5 土師器釜の変遷概念図

大窯第3段階以降の資料群に大窯第2段階の遺物が含まれるケース、そして極少量の大窯第2段階の資料が出土するケースに分けられ、遺物様相を論じるような形態での大窯第2段階の資料のまとまりを認識することがなかなかできなかった。このため織田信長入城前後の遺物様相をなかなか明らかにすることはできず、遺構配置なども詳らかにしなかったのである。

一方、今回瀬戸美濃窯産陶器の主体となる時期で検討すると、清須(A群;大窯第1段階主体)から小牧(大窯第2段階主体)そして清須(B群;大窯第3段階主体)へのスムーズな流れが把握されることが判明した。

これらのことから、清須城下町では大窯第2段階の製品が主体となる遺物様相の段階に遺構が希薄になる期間があることが予想される。つまり信長が小牧へ居城を移す時に、清須の全部ではないにしても、かなりの城下部分が小牧へ移転していた可能性を考古学的に指摘することができるのである。そして信長が小牧から岐阜・安土へ移動を進めていく中で、1586年よりも前の段階に再び清須へ人が集まってくるといえよう。再び清須が繁栄する時期が岐阜城移転の時期か、安土城移転の時期か、あるいは別の機会(例えば織田信忠が尾張の支配権を与えられる時など)かを現段階では特定し得ないが、大窯第3段階が主体となる遺物様相を呈する時期に清須の繁栄が再び蘇ることとなる。

尾張の中でみる清須 小牧 清須という状況は、瀬戸美濃窯産陶器だけではなく土師器の様相も当てはまるようである。詳細な検討は後考に譲りたいが、土師器釜については明瞭な形で清須 小牧 清須という段階設定を行うことができる(図5)。清須前期では羽付釜のみが存在するのに対して、小牧では羽付釜と羽無釜A類

が共存し、清須後期(C群)では羽無釜B類となる(鈴木1996の分類による)。つまり、清須前期から小牧へ移る際には釜の鐃がなくなる変化が生じ、小牧から再び清須に移る際には縦位の粘土紐による耳から横位の板状粘土による耳に変化するという流れをみることができる。

このように、今後尾張平野部の遺物様相を考える際には清須前期から小牧そして清須後期という流れを重視する必要があると考えられる。

おわりに

今回も推測に推測を重ねる結果となり、様々な課題や問題点も残ってしまった。しかし今回ここで強調したい点は、複数の消費地遺跡の遺物様相で共通する傾向は、消費地遺跡での普遍的な傾向として積極的に位置付けて考えていくことも必要ではないかということである。その見方で検討した時に、いくつかの新たに判明する事柄や問題点があることを本稿で示したつもりである。そして、そのことが瀬戸美濃大窯編年の問題や消費地遺跡の理解のあり方に少しでも寄与することができるのであれば、非常に喜ばしく思う次第である。

最後に、本稿を成すにあたり、藤澤良祐氏には瀬戸美濃窯産陶器の鑑定において全面的なご教示を得た。また、その際に岡本直久、松澤和人、金子健一、青木修、佐野元、河合君近をはじめとする財団法人瀬戸市埋蔵文化財センターの各職員の方々にも多大なご協力を得た。記して感謝いたします。なお、本稿に掲載された数値などについては筆者が最終的に集計をしており、そこに誤りがあるとすれば全てその責は筆者にあることをあらかじめ断っておく。

表 1 陶磁器・土器類の材質別組成の概要表（接合前破片数）

	清須A群	清須B群	清須C群	清須C群	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	小牧	小牧	小牧
	SD01	SK6570	SK6151	SK7029	SD01	SD02	SD03	SD06	SD08	新町1	新町2	新町3
瀬戸美濃窯産陶器	4726	463	743	2257	84	21	377	166	349	347	119	38
土師器皿	50519	1254	1504	1115	138	27	17446	17582	1183	896	155	43
土師器鍋釜類	5155	500	704	1009	27	19	143	6	31	1557	293	55
土師器その他	53	5	5	75	0	0	3	1	0	469	110	3
常滑窯産陶器	460	29	46	259	13	3	28	0	3	3	0	1
中国産磁器	169	24	55	68	2	1	6	2	5	7	1	1
その他	130	15	31	234	0	0	1	1	0	29	10	11
焼き物合計	61212	2290	3088	5017	264	71	18004	17758	1571	3308	688	152

表 2 瀬戸美濃窯産陶器の器種組成表（接合後破片数）

	清須A群	清須A群	清須A群	清須B群	清須C群	清須C群	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	小牧	小牧	小牧	小牧
	SK250	SK4501	SD01	SK6570	SK6151	SK7029	SD01	SD02	SD03	SD06	SD08	新町1	新町2	新町3	小牧山
天目茶碗	8	11	672	59	101	330	10	4	102	31	63	60	24	6	9
その他の碗	0	2	158	15	28	162	1	0	15	4	13	4	0	0	2
皿（除重圏皿）	11	64	616	51	118	394	10	3	24	6	36	143	26	17	29
重圏皿	0	9	377	30	66	70	6	0	3	11	32	35	21	3	3
播鉢	37	50	1145	68	162	328	36	8	95	54	84	55	30	8	16
その他の器種	41	18	1137	78	135	507	20	6	78	38	70	51	11	4	10
合計	97	154	4105	301	610	1791	83	21	317	144	298	348	112	38	69

表 3 瀬戸美濃窯産陶器全体の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器	清須A群	清須A群	清須A群	清須B群	清須C群	清須C群	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	小牧	小牧	小牧	小牧	
	SK250	SK4501	SD01	SK6570	SK6151	SK7029	SD01	SD02	SD03	SD06	SD08	新町1次	新町2次	新町3次	小牧山	合計
全体																
古瀬戸後 以前	1	0	29	0	0	5	4	3	5	4	23	0	1	0	0	75
古瀬戸後 か	0	0	402	6	4	3	1	0	3	11	12	1	0	0	0	443
古瀬戸後 古	1	0	41	0	0	7	1	0	0	0	4	0	0	0	0	54
古瀬戸後	26	3	312	12	3	34	14	1	25	6	20	0	0	0	0	456
古瀬戸後 新	31	22	671	15	20	19	7	2	130	50	66	1	0	0	1	1035
古瀬戸不明	0	0	20	0	0	7	2	1	6	6	10	0	0	0	0	52
古瀬戸か大窯1	32	0	1449	0	0	0	7	0	50	37	57	0	0	0	0	1632
大窯1前	0	9	38	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	55
大窯1	2	59	597	29	25	32	9	1	49	27	56	50	15	10	1	962
大窯1後	0	1	5	0	0	0	0	0	7	0	0	2	4	1	0	20
大窯1か2	3	42	212	9	18	11	1	3	14	1	12	51	17	7	2	403
大窯2前	0	7	5	4	0	1	1	0	2	0	0	37	10	2	4	73
大窯2	1	9	33	23	32	25	9	3	5	1	9	89	28	7	16	290
大窯2後	0	2	1	8	2	12	0	0	0	0	0	23	2	0	2	52
大窯2か3	0	0	1	0	12	18	16	0	0	1	21	53	22	7	5	156
大窯3前	0	0	15	34	20	38	2	2	1	0	1	24	12	2	3	154
大窯3	0	0	21	58	95	49	3	0	0	2	0	0	0	0	18	246
大窯3後	0	0	1	41	33	103	1	0	2	0	0	0	0	0	4	185
大窯3か4	0	0	2	0	100	405	1	1	0	0	0	0	0	0	0	509
大窯4前	0	0	4	0	26	95	0	1	0	0	0	0	0	0	0	126
大窯4	0	0	3	0	48	73	0	0	0	0	0	0	0	0	0	124
大窯4後	0	0	5	2	62	398	0	0	0	0	1	0	0	0	1	469
大窯不明	0	0	238	59	109	132	4	3	10	0	4	17	1	2	8	587
登窯1	0	0	0	0	1	213	0	0	0	0	0	0	0	0	2	216
登窯2以降	0	0	0	0	0	105	0	0	0	0	0	0	0	0	1	106
登窯不明	0	0	0	1	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
不明	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	97	154	4105	301	610	1791	83	21	317	144	298	348	112	38	69	8488

表4 瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器	清須A群	清須A群	清須A群	清須B群	清須C群	清須C群	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	小牧	小牧	小牧	小牧	合計
天目茶碗	SK250	SK4501	SD01	SK6570	SK6151	SK7029	SD01	SD02	SD03	SD06	SD08	新町1次	新町2次	新町3次	小牧山	
古瀬戸後 以前			3								4					7
古瀬戸後 か			3													3
古瀬戸後 古			3			7										10
古瀬戸後											2					2
古瀬戸後 新	8	3	219	6	4	7	3		53	17	11					331
古瀬戸不明			6								3					9
古瀬戸か大窯1			283				1		16	5	16					321
大窯1前			10						8							18
大窯1		8	132	5	8	12	3	1	17	8	21	14	3			232
大窯1後									7			2	3	1		13
大窯1か2					1			1	1			1	3			7
大窯2前			1	3								3	2		1	10
大窯2			3		10	6	1	2		1	4	25	9	4	5	70
大窯2後			1	3								10	2			16
大窯2か3							1									1
大窯3前			2	15	2	9					1	1	2	1		33
大窯3			5	14	30	13									3	65
大窯3後				13	5	30	1									49
大窯3か4			1		12	102										115
大窯4前					1	35										36
大窯4					15	4										19
大窯4後						53										53
大窯不明					13						1	4				18
登窯1						44										44
登窯2以降						8										8
登窯不明																0
不明																0
合計	8	11	672	59	101	330	10	4	102	31	63	60	24	6	9	1490

表5 瀬戸美濃窯産陶器その他の碗の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器	清須A群	清須A群	清須A群	清須B群	清須C群	清須C群	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	岩倉	小牧	小牧	小牧	小牧	合計
その他の碗	SK250	SK4501	SD01	SK6570	SK6151	SK7029	SD01	SD02	SD03	SD06	SD08	新町1次	新町2次	新町3次	小牧山	
古瀬戸後 以前			3						1		6					10
古瀬戸後 か																0
古瀬戸後 古			1													1
古瀬戸後			2	1						1						4
古瀬戸後 新			6						1		1					8
古瀬戸不明																0
古瀬戸か大窯1																0
大窯1前			23													23
大窯1			114		2				13	3	6					138
大窯1後																0
大窯1か2		2	2	3								1				8
大窯2前																0
大窯2				1	1							1				3
大窯2後																0
大窯2か3												1				1
大窯3前			5	1	1		1					1				9
大窯3			2	3	1	1										7
大窯3後				6	6	6									2	20
大窯3か4						4										4
大窯4前					3	1										4
大窯4					4	16										20
大窯4後					10	98										108
大窯不明																0
登窯1						25										25
登窯2以降						11										11
登窯不明																0
不明																0
合計	0	2	158	15	28	162	1	0	15	4	13	4	0	0	2	404

表6 瀬戸美濃窯産陶器皿（除重圏皿）の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器 皿（除重圏皿）	清須A群 SK250	清須A群 SK4501	清須A群 SD01	清須B群 SK6570	清須C群 SK6151	清須C群 SK7029	岩倉 SD01	岩倉 SD02	岩倉 SD03	岩倉 SD06	岩倉 SD08	小牧 新町1次	小牧 新町2次	小牧 新町3次	小牧 小牧山	合計
古瀬戸後 以前			5				1		1		3					10
古瀬戸後 か						1				1						2
古瀬戸後 古			23								3					26
古瀬戸後	4		49				3				2					58
古瀬戸後 新	3	13	134	3	4	4			1	2	3				1	168
古瀬戸不明																0
古瀬戸か大窯1																0
大窯1前			3													3
大窯1		38	186	6	2	6	2		8	2	14	19	3	7	1	294
大窯1後																0
大窯1か2	3	8	173	6	9			1	10	1	6	41	8	6	2	274
大窯2前			4			1	1		1			28	6	2	3	46
大窯2	1	4	18	8	13	4	2	1			1	44	4	1	8	109
大窯2後		1		2		12						7				2
大窯2か3			1		12	17					1	1	1		1	34
大窯3前			8	8	2	17			1			3	4	1	1	45
大窯3			6	5	31	18	1									65
大窯3後				13	7	48			2							71
大窯3か4					1	12										13
大窯4前			4		9	37		1								51
大窯4					1											1
大窯4後			2		27	118					1				1	149
大窯不明											2					2
登窯1						61										63
登窯2以降						38										39
登窯不明															1	1
不明																0
合計	11	64	616	51	118	394	10	3	24	6	36	143	26	17	29	1548

表7 瀬戸美濃窯産陶器重圏皿の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器 重圏皿	清須A群 SK250	清須A群 SK4501	清須A群 SD01	清須B群 SK6570	清須C群 SK6151	清須C群 SK7029	岩倉 SD01	岩倉 SD02	岩倉 SD03	岩倉 SD06	岩倉 SD08	小牧 新町1次	小牧 新町2次	小牧 新町3次	小牧 小牧山	合計
古瀬戸後 以前																0
古瀬戸後 か																0
古瀬戸後 古																0
古瀬戸後																0
古瀬戸後 新		1	176	2	3				2	6	19	1				210
古瀬戸不明																0
古瀬戸か大窯1			68													68
大窯1前																0
大窯1		7	117	12	8	7	3		1	5	9	10	7			186
大窯1後																0
大窯1か2											2	2	3	1		8
大窯2前												4	2			6
大窯2		1	11	8	7	6	2				2	10	8	1		56
大窯2後												2				2
大窯2か3												3			1	4
大窯3前							1					3	1			5
大窯3			5	7	31										2	45
大窯3後				1	5	1										7
大窯3か4						43										43
大窯4前						1										1
大窯4					12											12
大窯4後						10										10
大窯不明														1		1
登窯1						2										2
登窯2以降																0
登窯不明																0
不明																0
合計	0	9	377	30	66	70	6	0	3	11	32	35	21	3	3	666

表8 瀬戸美濃窯産陶器搗鉢の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器 搗鉢	清須A群 SK250	清須A群 SK4501	清須A群 SD01	清須B群 SK6570	清須C群 SK6151	清須C群 SK7029	岩倉 SD01	岩倉 SD02	岩倉 SD03	岩倉 SD06	岩倉 SD08	小牧 新町1次	小牧 新町2次	小牧 新町3次	小牧 小牧山	合計
古瀬戸後 以前																0
古瀬戸後 か																0
古瀬戸後 古			6				1				1					8
古瀬戸後	1		1				1	1		1						5
古瀬戸後 新	9	4	15	3	8	5	4		43	16	26					133
古瀬戸不明																0
古瀬戸か大窯1	25		889				6		34	30	32					1016
大窯1前		9	2													11
大窯1	2	4	7	5	2	1	1		5	6	3	1				37
大窯1後		1	5											1		7
大窯1か2		20			8	11	1	1				4	3			48
大窯2前		7		1					1			2				11
大窯2		4	1	5	1	6	4		5		2	9	7	1	3	48
大窯2後		1		2	2							4				9
大窯2か3							14			1	17	22	17	7	3	81
大窯3前				3	5	12		2				11	2		1	36
大窯3			1	6		2	2			2					5	18
大窯3後			1	3	8	18									1	31
大窯3か4					38	179	1	1								219
大窯4前					8	21										29
大窯4																0
大窯4後				2	13	41										56
大窯不明			217	37	68		1	3	7		1	2			3	339
登窯1					1	28										29
登窯2以降						4										4
登窯不明				1												1
不明																0
合計	37	50	1145	68	162	328	36	8	95	54	84	55	30	8	16	2176

表9 瀬戸美濃窯産陶器その他の器種の時期別組成表（接合後破片数）

瀬戸美濃窯産陶器 その他の合計	清須A群 SK250	清須A群 SK4501	清須A群 SD01	清須B群 SK6570	清須C群 SK6151	清須C群 SK7029	岩倉 SD01	岩倉 SD02	岩倉 SD03	岩倉 SD06	岩倉 SD08	小牧 新町1次	小牧 新町2次	小牧 新町3次	小牧 小牧山	合計
古瀬戸後 以前	1		18			5	3	3	3	4	10					48
古瀬戸後 か			399	6	4	2	1		3	10	12	1				438
古瀬戸後 古	1		8													9
古瀬戸後	21	3	260	11	3	34	10		25	4	16					387
古瀬戸後 新	11	1	121	1	1	3		2	30	9	6					185
古瀬戸不明			14			7	2	1	6	6	7					43
古瀬戸か大窯1	7		209							2	9					227
大窯1前																0
大窯1		2	41	1	3	6			5	3	3	6	2	3		75
大窯1後																0
大窯1か2		12	37						3		4	2				58
大窯2前																0
大窯2				1		3										4
大窯2後				1												1
大窯2か3						1	1				3	26	4			35
大窯3前				7	10							5	3		1	26
大窯3			2	23	2	15									4	46
大窯3後				5	2											7
大窯3か4			1		49	65										115
大窯4前					5											5
大窯4			3		16	53										72
大窯4後			3		12	78										93
大窯不明			21	22	28	132	3	3				11	1	1	5	227
登窯1						53										53
登窯2以降						44										44
登窯不明						5										5
不明						1										1
合計	41	18	1137	78	135	507	20	6	78	38	70	51	11	4	10	2204

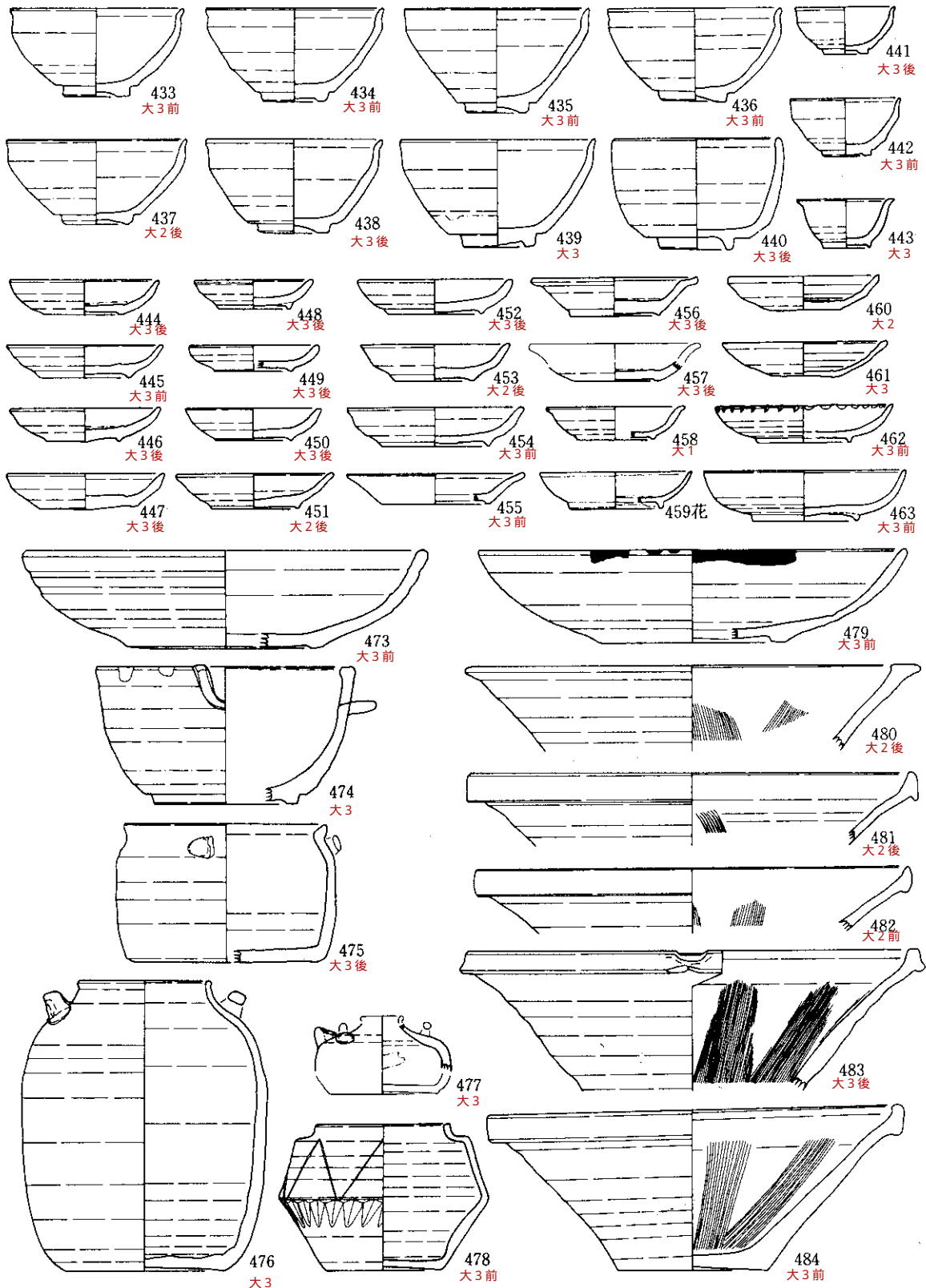


図6～7に付した遺物番号は鈴木編1994で報告された番号を使用。
遺物番号下の略字は以下のとおり
大 = 大窯の各段階

図6 清洲城下町遺跡 S K 6570 出土 瀬戸美濃窯産陶器 S = 1/4

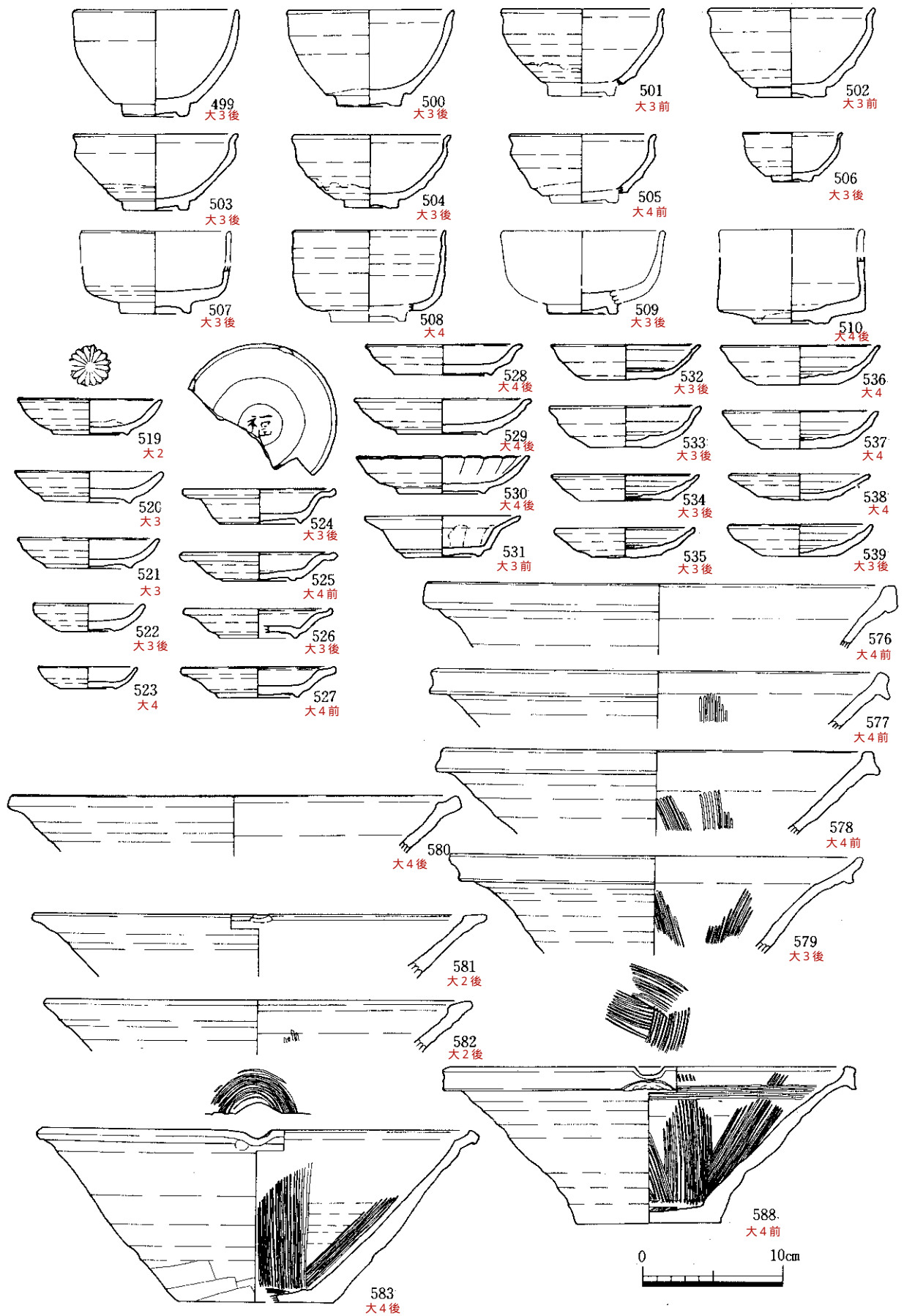
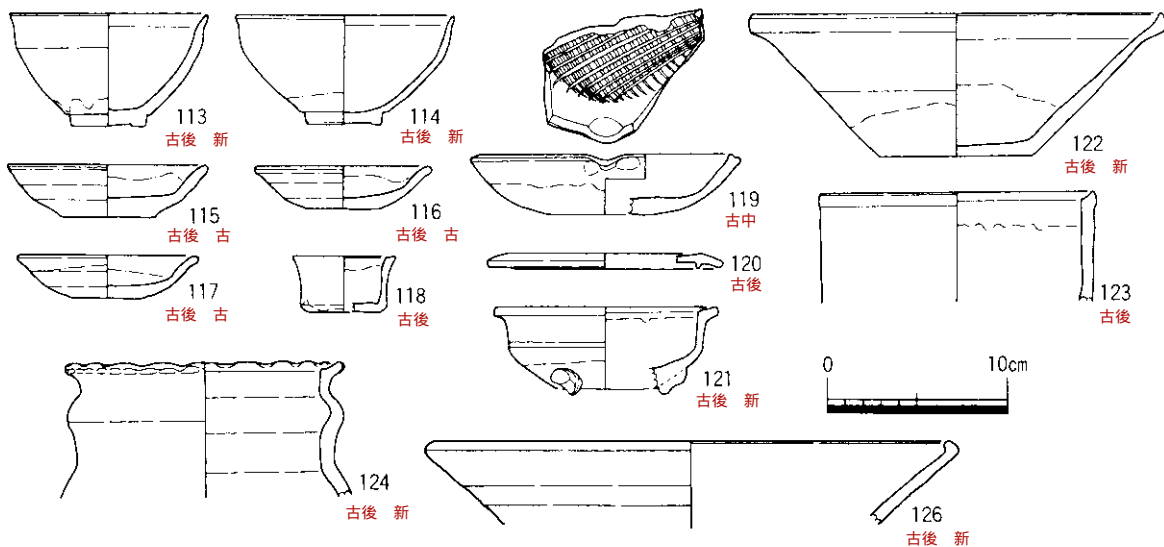


図7 清洲城下町遺跡 S K 6151 出土 瀬戸美濃窯産陶器 S = 1/4

参考・引用文献

- 伊藤嘉章 1988「瀬戸・美濃における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要2』
 井上喜久男 1985「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中近世土器の基礎研究』
 内堀信雄 1993「発掘出土陶磁器からみた加納城の変遷」『郷土研究ぎふ第64号』岐阜県郷土資料研究協議会
 内堀信雄編 1999「城之内遺跡」(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第3集
 梅本博志 1986「清洲城下町遺跡」『年報昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 蟹江吉弘編 1996「清洲城下町遺跡6」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第65集
 小牧市教育委員会 1998「小牧山城発掘調査現地説明会資料」
 鈴木重治 1989「中世から近世への画期 陶磁考古学の視点から」『中近世土器の基礎研究』
 鈴木正貴編 1990「清洲城下町遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集
 鈴木正貴 1990「尾張の城館遺跡出土の陶磁器」『考古学フォーラム1』
 鈴木正貴編 1994「清洲城下町遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
 鈴木正貴・小嶋廣也編 1994「清洲城下町遺跡・外町遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集
 鈴木正貴 1995a「清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集
 鈴木正貴 1995b「清須城下町および名古屋城における陶磁器の組成」『貿易陶磁研究No.15』
 鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 鈴木正貴編 1997「清洲城下町遺跡7」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第70集
 鈴木正貴 2000「土師器皿からみた戦国期城下町と織豊期城下町-土師器皿からみた清須城下町の構造とその変遷を中心に-」『織豊城郭第7号』
 武部真木編 1997「大毛池田遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集
 立松彰編 1998「知多弥勒寺遺跡発掘調査報告」東海市教育委員会
 中嶋隆・坪井裕司・浅野友昭 1998「小牧城下町発掘調査報告書 新町遺跡」小牧市教育委員会
 榎崎彰一 1976「美濃の古陶」光琳社出版
 榎崎彰一 1990「総括」『尾呂』瀬戸市教育委員会
 藤澤良祐 1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
 藤澤良祐 1993「瀬戸市史陶磁史篇四」
 藤澤良祐 2000「西日本における瀬戸・美濃大窯製品の受容」『列島に華開く大窯製品 西日本の様相』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
 松原隆治編 1992「岩倉城遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集



古中は古瀬戸中期、古後は古瀬戸後期の各段階を示す。

図8 S K 250 出土瀬戸美濃窯産陶器